

日本の海をかえるウェブ

— 東京で初「海オフ会」 —

全日本内航船員の会 松見 準

今、Twitter を使ってツイートしている人が世界中にいる。親しみやすく人間味のある言葉を発信する個性的な人の中には「名物」となっている人気者まで誕生している。

情報源の多様化によって、「情報」の性質、価値、対象、収集方法にも劇的な変化が起こっている。

テレビや雑誌で紹介される新商品の記事よりも、商品を実際に利用した消費者のクチコミ速報の方が遥かに影響力が強いものになっている。ソーシャルメディアが登場して以降、市民社会に採まれた現実的な情報の中に私たちは生活自体をさらし始めたのだ。

専門的な分野に関する生の情報収集でも、以前であれば、どこかで纏められた本や資料、報告書、統計などから現状を読み解く事が一般的だった。しかし、Twitter から溢れ出ている情報は、まさにその専門的な場所や人からダイレクトに届く「現実情報」そのものであって、その場、その時にでた、ため息や喜び、感動、疑問などまでが、現場にいる人の内面の言葉で流れているのだ。

聞こえなかった声が「海」から聞こえてきた

日本の海。そこには、海辺で働く、物流産業に従事する人たちがいる。長らく、「海」といえばビーチ、ダイビング、フィッシングなどに代表されるレジャーイメージに押されがちで、物流関係者の存在やその声はほとんど意識されることは無かった。しかし、今では Twitter を通して体温を伴った情報が市民社会へ伝わってくる。

コンテナターミナルで問題になっているトラック渋滞の課題も、ドライバーの温度で社会に届いた。苦勞してひどい時化の海を航海してくる航海士を迎え入れたい気持ちが陸の人の心に突然芽生えたりもする。また、船舶の安全航行をサポートするポトラジオの職員の粋な性格を船乗りが知ることになったりもした。そして、その一部始終を観察する一般の人たちがいる事を誰しもが知ることになる。

SNS と新しい「海の時代」

Twitter を覗けば、海に関心を持ってきている人が徐々に繋がり合い、海と陸とを有機的に繋いでいる事がわかる。ここでは航海中の船員もガントリークレーンを動かす人も、トラック輸送をする人も、それをマネジメントしている人も、空を見上げて洗濯物を干している人も、みながソーシャルな（社会的な）中にいる。

顔を知らなくても、ツイートを流し見しているだけで、この人は面白そうな人だ。話をしてみたいという感情がわく。こうしてSNSを介して繋がった人たちが実際にオフ会を開催し、どこかで集合してみたいくなるのは必然だろう。

初の「海オフ会」。東京で開催

海に関してタイムラインを賑わす彼らが、一斉に集合する大会議、「海オフ」が6月7日、東京・芝浦で開かれた。会場はふ頭近くのレストラン。参加者は、現役の内航船員はもちろん、実際に港湾で物流に携わっている人や倉庫業の職員、船舶機器会社の営業マンなど、海に近い様々な産業から集まった。中には関西から駆けつけた人までいる。

そして、この「海オフ」が特徴的なのは、参加者に一般の人の姿も見られることだ。ソーシャルな情報交流の拡がりによって、かつては遠かった「働く海」の世界が、陸の市民社会に入り込んできている兆しを感じる。

旅行会社に勤務する船好きの社会人。「とにかくガントリークレーンが大好きで」というカメラ女子。「彼氏の職場がコンテナヤードなので」という一般の人が参加してくれている。造船分野を学ぶ現役大学生も駆けつけ、約15名の男女がTwitterを通じて初集合を果たした。今後、この分野の価値を高めていく人たちの集まりとなっている。

緩く自由な自然な繋がり

初集合、初対面であっても、Twitter上ではすでに交流がある。しかし、実際に集合するとお互いの顔がわからないということで、ネット内で参加者が使っているアイコン画像を名札にし、開始前に配布する方法がとられた。簡単な挨拶でオフ会が緩やかにスタートすると、それぞれで名刺交換や、各専門分野ごとのお土産交換などが自然に始まった。

実名を名乗らない事でバーチャル世界と言われた事もあったネット内の交流だが、実名であるか匿名であるかに大した意味はなく、あっさり実名の交流に繋がっていく事がわかる。

拡がる海オフ。繋がる海オフ

東京で実現した初の「海オフ」を受けて、関西方面のTwitterでは、たちまち「次は関西で！」という声が起こった。関西にも人気のある発信者は多いため、関東からの参加希望の声も早速聞こえてきた。

今回の東京での「海オフ」は、もともとは参加者のうちの2人が一緒に話しませんかとツイートしていたところに、たまたま多くの注目が集まったのが切っ掛け。まだ何ら面倒な準備も必要としないシンプルなオフ会。この緩い始まりの「海オフ」は、今後まだまだ変化し、発展していくだろう。

全日本内航船員の会は、海運の立場から常にこの流れを応援していきたいと考える。日本社会の内航物流への理解から始まる産業の発展と日本人船員へ向けられる興味は、必ず海運現場に良い影響を及ぼしていく。「働く海」が陸の生活者の感性に拡がり、台風の日にもふと海を思い、そこに物流を支える日本人船員がいる事を考えてもらえるような社会を求めていく。

海オフ会。是非是非、これから色々な人に参加していただきたい。（了）